

【課題3】

いづれにもまして春の季節の長いといふ事はまた此地方を限りなく悲しいものに思はせる、麥むぎのび、見わたす限りの平野に黄もろい菜の花の毛氈もうせんが柔かな軟風なんふうに薰かおり初めるころ、まだ見ぬ幸さいわいを求むるためにうらわかい町の娘の一群ひとむれは笈おいに身を窶やつし、哀れな巡禮じゅんれいの姿となつて、初めて西國さいごく三十三番の札所ふだしょを旅して歩く、巡禮あに出る習慣は別に宗教上の深い信仰からでもなく、單よにお嫁め入りの資格としてどんな良家の娘にも必要であつた。十その留守の間にも水車は長閑かに廻り、町端れの飾屋の爺は大きな鼈甲縁べつこうふちの眼鏡をかけて、怪しい金象眼きんぞうがんの愁うれいにチンカチと鎚つちを鳴らし、片思の薄葉鐵職人かたおもいはぢり／＼と赤い封蠟ふうろうを溶かし、黄色い支那服の商人は生温なまぬるい挨拶の言葉をかけて戸毎とごとを覗き初める。春も半ばとなつて菜の花もちりかゝるころには街道のところに木蠟きろうを平準ならして干す畑が蒼白く光り、さうして狐憑きつねつきの女が他愛もなく狂ひ出し、野の隅には粗末な蓆張りの圓天井まるが作られる。その芝居小屋のかげをゆく馬車の喇叭らっぱのなつかしさよ。

さはいへ大麥の花が咲き、からしの花も實みとなる晩春の名残惜しさは青くさい芥子けしの萼うてなや新らしい蠶豆そらまめの香におひにいつしかとまたまぎれてゆく。

まだ夏には早い五月の水路に杉の葉の飾りを取りつけ初めた大きな三神丸さんじんまるの一部をふと學校がへりに發見した沖ノ端の子供の喜びは何に譬たとへやう。鱸ともの方の化粧部屋は蓆むしろで張られ、昔ながらの廢れかけた舟舞臺ふなぶたいには櫻の造花つくりばなを隈なくかざし、欄干の三方に垂らした御簾みすは彩色さいしきも褪せはてたものではあるが、水天宮の祭日となれば粹な町内の若い衆しゅうが紺の半被はつぴに棹さおさゝれて、幕あひには笛や太鼓や三味線の囃子面白く、町を替ゆるたびに幕を替え、日を替ゆるたびに歌舞伎の藝題げだいもとり替えて、同じ水路を上下すること三日三夜、見物は皆あちらこちらの溝渠ほりわりから小舟に棹さおさして集まり、華やかに水郷すいきやうの歡かんを盡つくして別れるものゝ、何處どこかに頽廢たいはいの趣おもむきが見えて祭の濟んだあとから夏の哀れは日に日に深くなる。

この騒ぎが靜まれば柳河にはまたゆかしい螢の時季が来る。

あの眼の光るは

星か、螢か、鵜うの鳥か

螢ならばお手にとろ、

お星様ならおがみませう……

おさな

穉い時私はよくかういふ子守唄をきかされた、さうして恐ろしい夜の闇にをびえながら、乳母の背中から手を出して例の首の赤い螢を握りしめた時私はどんなに好奇の心に顫ふるへたであらう。實際じっさい螢は地方の名物である。馬鈴薯じゃがいもの花さくころ、街の小舟はまた幾つとなく矢部川の流れを遡さかのぼり初める。さうして甘酸あまずゆい燐光りんこうの息するたびに、あをあをと眼めに沁しみみる螢籠ほたるかごに美しい假寝の夢を時たまに閃めかしながら水のまにまに夜よをこめて流れ下るのを習慣とするのである。